

## 駅をご利用の皆様、少し立ち止まってみませんか？

芸大通駅をアート感あふれ、魅力ある駅とするため、  
愛知県立芸術大学の学生が演奏する楽曲をBGMとして流しています。  
季節ごとにテーマを決め、テーマに沿った楽曲を選定しましたので、少し立ち止まって、お楽しみください。

# 【春】

## 新学期の通学路

1. J.ハイドン：弦楽四重奏曲 変ホ長調 作品33-2「冗談」第4楽章  
ヨーゼフ・ハイドン(1732-1809)は、オーストリアの作曲家です。交響曲の父としても有名ですが、弦楽四重奏曲のジャンルを確立し、弦楽四重奏曲の父とも呼ばれています。  
この曲は、1781年49歳の時に作曲され、軽やかで気楽な曲となっています。  
第4楽章はジグの曲想に基づき、春風のように軽快なロンド形式で書かれています。終わりに近づくと、ゆったりしたフレーズが挟み込まれたかと思うと、ロンド主題の楽想がとぎれとぎれに繰り返され、そのうちにふっと終わってしまうところから、「冗談」の名が付いたということです。新しい事に向かう時の期待と不安が入り混じった気持ちに通じるものがあります。
2. A.コレッリ(編曲者不明)：ヴァイオリン・ソナタ 作品5-11 終楽章に基づく編曲  
アルカンジェロ・コレッリ(1653-1713)は、イタリアの作曲家で、ヴァイオリニストです。イタリア室内楽の成果を集大成し、後期バロック器楽の隆盛に貢献しました。  
ヴァイオリン・ソナタ作品5は12曲から成り、1700年にローマで出版されました。作品5-11は室内ソナタの形式で書かれていて、終楽章は舞曲のガヴォットです。16分音符の細かい音による軽快なフレーズが春のうきうきした気分を思わせます。
3. F.メンデルスゾーン：弦楽のための交響曲第7番 二短調 第2楽章  
ドイツの作曲家、フェーリクス・メンデルスゾーン=バルトルディ(1809-1847)は、19世紀の音楽家の中でも、天賦の才能に恵まれた上に最高の教育を受けてその才能を磨いた優等生です。  
この第7番は、12～14歳の時に練習課題として書かれた初期のシンフォニアの1曲です。第2楽章は、各楽器が対話をするように演奏しています。  
春の暖かな日におしゃべりしながら通学する様子を思わせるのどかな曲です。
4. J.ハイドン：弦楽四重奏曲 変ロ長調 作品9-5 第1楽章  
ハイドンの弦楽四重奏曲のうち初期のもので、1769～70年の作品です。バロックの様式を残しながら、主題等が独創的な性格を持ち、新しい様式の導入も見られる曲です。  
第1楽章は通常ソナタ形式のところ、この曲では変奏曲になっていて、主題の後、それぞれ趣きの異なる4つの変奏が行われます。第4変奏では主題が再び現れます。  
主和音基調の清楚なメロディーが改まった気分を醸し出します。
5. J.ハイドン：弦楽四重奏曲 変ロ長調 作品50-1 第2楽章  
この作品50-1は1787年の作品です。プロイセン王フリードリヒ2世へ献呈されたことから、プロシア四重奏曲と呼ばれています。  
この第2楽章は変奏曲ですが、初期の作品9-5と異なり、主題の変形の度合いはさほど大きくなく、終始穏やかに進んでいきます。  
新学期の通学路、次第に友達が増えていく様子になぞらえて聞くことができます。

 愛知県立芸術大学



## 駅をご利用の皆様、少し立ち止まってみませんか？

芸大通駅をアート感あふれ、魅力ある駅とするため、  
愛知県立芸術大学の学生が演奏する楽曲をBGMとして流しています。  
季節ごとにテーマを決め、テーマに沿った楽曲を選定しましたので、少し立ち止まって、お楽しみください。

### 【夏】

#### 水の表情 — 川から海へ

1. L.v.ベートーヴェン：弦楽四重奏曲 ハ長調 作品59-3「ラズモフスキー第3番」第4楽章

ドイツの作曲家、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)は、ウィーンに滞在していたロシア大使ラズモフスキー伯爵(1752-1836)に依頼されて、1806年、35～36歳の時に3曲の四重奏曲を作曲しました。この曲はそのうちの1曲です。

ベートーヴェン中期の、古典的形式の自由な拡大という彼独自の特徴が表れている、明るく力強い作品です。第4楽章は、フーガの技法を用いたソナタ形式で、川が勢いよく流れるように演奏されます。

2. F.シューベルト：弦楽四重奏曲 ニ短調 D.810「死と乙女」第2楽章

この曲は、オーストリアの作曲家フランツ・シューベルト(1797-1828)により1824年に作曲されました。

第2楽章の主題には、自身が1817年に作曲した、結婚前夜の娘と死神との対話を描いた歌曲〈死と乙女〉の、暗く重々しい旋律が使われています。ロマン派らしい感情表現で、主題とその6つの変奏とコーダにより悲劇的な曲想を様々に表現しています。途中長調となりますが、甘く魅力的なフレーズが死神の誘いを想起させます。

危険と背中合わせの川や海の表情と通じるものがあります。

3. G.ロッシェニ：チェロとコントラバスのための二重奏曲 第3楽章

ジョアキーノ・ロッシェニ(1792-1868)はイタリアの作曲家です。19世紀前半において最高のイタリア人作曲家と賞賛されていました。

この曲は、友人のために1824年に書いたもので、ロッシェニがオペラだけでなく器楽曲にも長けていたことを示す、夏の日差しのように明るい1曲です。第3楽章は、ポロネーズ風の調子の良い音楽で、チェロとコントラバスそれぞれが交互に主導権を握った後、双方が技巧を競り合い、華やかに曲を閉じます。

川が海に流れ込み水が溶け合う様子を思い起こさせます。

4. F.シューベルト：弦楽五重奏曲 ハ長調 D.956 第2楽章

シューベルト最後の器楽作品です。1828年秋、亡くなるわずか1か月半ほど前に作曲されました。

通常ヴィオラが追加される場所にチェロが追加され、響きが重厚になっています。最後の器楽作品とはいえ、滅びに向かう予感を感じられません。第2楽章は3部形式で、静かで明るい第1部、第3部と、激しい第2部の対比が効果的です。

生命を育む広人で豊かな海を思わせる生き生きとした曲です。

 愛知県立芸術大学



## 駅をご利用の皆様、少し立ち止まってみませんか？

芸大通駅をアート感あふれ、魅力ある駅とするため、  
愛知県立芸術大学の学生が演奏する楽曲をBGMとして流しています。  
季節ごとにテーマを決め、テーマに沿った楽曲を選定しましたので、少し立ち止まって、お楽しみください。

# 【秋】

## 紅葉の公園での読書

### 1. B.アルト：コントラバス四重奏のための組曲より メヌエット

ベルンハルト・アルト(1903-1945)は、現在のポーランドからチェコにまたがるシレジア地方出身で、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の第1ヴァイオリン奏者です。

ベルリンフィルの同僚の4名のコントラバス奏者の依頼により、1933年にこの組曲を書きました。そしてこの曲が、コントラバス四重奏のための作品としては最初の作品となったのです。

メヌエットは、3拍子のリズムに乗って優しいメロディーが暖かなハーモニーのうちに奏でられます。

色鮮やかな紅葉の絨毯を踏みしめながら書物を紐解く様子が目に浮かびます。

### 2. J.ハイドン：弦楽四重奏曲 変ロ長調 作品50-1 第2楽章

ヨーゼフ・ハイドン(1732-1809)は、オーストリアの作曲家です。交響曲の父としても有名ですが、弦楽四重奏曲のジャンルを確立し、弦楽四重奏曲の父とも呼ばれています。

この作品50-1は、55歳の時の作品です。この第2楽章は変奏曲ですが、初期の作品と異なり、主題の変形の度合いはさほど大きくなく、終始穏やかな流れの中、途中短調になり思索的なフレーズが奏された後、再び長調に戻ります。

変奏に従い、色とりどりの紅葉に囲まれながら静かに物語の展開を楽しんでいるようです。

### 3. F.メンデルスゾーン：弦楽四重奏曲 ニ長調 作品44-1 第3楽章

ドイツの作曲家、フェーリクス・メンデルスゾーン=バルトルディ(1809-1847)は、19世紀の音楽家の中でも、天賦の才能に恵まれた上に最高の教育を受けてその才能を磨いた優等生です。

メンデルスゾーンの作品44は3曲からなり、1837~38年に作曲されました。作品44-1の第3楽章はロ短調でとても感傷的な楽章となっています。第1ヴァイオリンの旋律が、第2ヴァイオリンの駆け足で刻む音と低弦のピチカートに支えられて感情をこめて奏されます。

何度も現れる下降音型が秋の風情を醸し出します。物語の世界に入り込んで心動かされた様子が窺えます。

### 4. B.アルト：コントラバス四重奏のための組曲より ユーモレスク

アルトは、ベルリンフィルの同僚のために、ヴァイオリン、コントラバス、ホルンなどの曲を書いています。このユーモレスクは3部形式で、第1部、第3部の軽快な部分と対照的な第2部のゆったりした部分から成ります。

軽快な部分が色とりどりの紅葉を表し、ゆったりとした部分で思索を巡らす秋の読書の風景を演出しているようです。

 愛知県立芸術大学



## 駅をご利用の皆様、少し立ち止まってみませんか？

芸大通駅をアート感あふれ、魅力ある駅とするため、  
愛知県立芸術大学の学生が演奏する楽曲をBGMとして流しています。  
季節ごとにテーマを決め、テーマに沿った楽曲を選定しましたので、少し立ち止まって、お楽しみください。

# 【冬】

## 厳寒の中にも楽しい雪遊び

### 1. F.メンデルスゾーン：弦楽四重奏曲 変ホ長調 作品12 第1楽章

ドイツの作曲家、フェーリクス・メンデルスゾーン＝バルトルディ(1809-1847)は、19世紀の音楽家の中でも、天賦の才能に恵まれた上に最高の教育を受けてその才能を磨いた優等生です。

1829年にロンドンのフィルハーモニー協会に招かれて、初めてロンドンを訪れ、その滞在中にこの作品12を作曲しました。第1楽章は序奏とソナタ形式の部分とからなっています。静かな序奏の後、ゆったりしつつも軽やかなソナタ形式の第1主題が現れます。

冬の朝の厳しくきりっとした空気が感じられます。

### 2. F.メンデルスゾーン：弦楽四重奏曲 へ短調 作品80 第3楽章

この曲は、1847年、メンデルスゾーンの亡くなる2か月ほど前に書かれました。4歳年上の姉ファニーが亡くなった悲しみに打ちひしがれながらも、気力を振りしぼり作曲したのですが、疲労が重なり体力も落ちている様子が曲全体に現れています。

第3楽章は、展開部のないソナタ形式。変イ長調ではありますが、楽章を通して悲嘆にくれる感情がベースになっています。人生の厳しい冬を感じさせる曲です。

### 3. F.シューベルト：アルペジオーネ・ソナタ D.821 第1楽章

フランツ・シューベルト(1797-1828)は、オーストリアの作曲家です。

アルペジオーネとは、1824年にウィーンで考案された楽器で、本質的にはギターと同じ調弦のヴィオラ・ダ・ガンバです。短命の楽器で、同年シューベルトがこの楽器のためにこの曲を書いたため記録に残っています。

第1楽章はソナタ形式です。優美でもの悲しい第1主題と、軽やかではあるがどこか影がある第2主題により進められます。

全体として、冬は辛く厳しいがそれだけではない、きっといいこともあるだろうという期待感が感じられます。

### 4. A.ドヴォルザーク：弦楽のためのセレナード ホ長調 作品22 第3楽章

アントニン・ドヴォルザーク(1841-1904)はチェコの作曲家です。民族的な特色を音楽に効果的に用いたことで知られています。

セレナードは元来、夜、恋人の窓の下で青年がギターなどを鳴らしながら歌った恋の歌です。この曲は、1875年、33歳の時に奨学金を得た喜びのうちに作曲されました。第3楽章は、カノンで始まる軽快なスケルツォにトリオが加わる複合3部形式で書かれています。

雪遊びのような楽しさがあふれる曲です。

 愛知県立芸術大学